

聖書：使徒 9：10～19a

説教題：選びの器

日時：2013年10月27日

キリスト教会最大の迫害者サウロに、ダマスコ途上で復活の主がご自身を現わされました。イエスの弟子たちを見つけ次第縛り上げて、エルサレムに引っ張って来ようとしていた彼に、天から声がありました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」これはサウロに大変な衝撃を与えました。十字架につけられ、神に呪われて死んだはずのイエスが生きている！しかもこのような栄光の内に高く上げられている！サウロは天からの光と声に接して、地に倒れてしまいます。それは同時に彼のそれまでの人生すべてが音を立てて崩れて行く出来事でもありました。神のために歩いて来たとはばかり思っていた自分の人生は、実は神への反逆を積み重ねてきた人生であった。しかし主はそんなサウロを滅ぼさず、「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられる」と言われます。サウロはここに一筋の希望の光を見出したことでしょうか。こんな自分がお生きて良い、と主は言ってくださっている。そしてわたしに何かなすべきことを与えてくださる。サウロはダマスコへと手を引かれて入って行き、目が見えないまま、三日間飲み食いしませんでした。その彼にどんな導きを主はくださったのか、が今日の箇所に記載されています。

主はこのために、アナニヤという弟子を用いられます。彼はダマスコにいた信者で、22章12節には「律法を重んじる敬虔な人で、そこに住むユダヤ人全体の間で評判の良い人」と言われています。その彼に主が幻の中で現れて、「サウロというタルソ人をユダの家に尋ねよ」と言われます。アナニヤはまず抵抗します。13～14節の彼の言葉から分かることは、サウロのエルサレムにおけるひどいしわざはすでにダマスコの町に知れ渡っていた、ということです。アナニヤは言いました。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。」またサウロが、ダマスコで信者たちをさらに捕縛するために向かって来ていることも知っていました。14節：「彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちを捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」ところが主はそのサウロのところへ自ら出向いて行け！と言われるのです。それはほとんど自殺行為ではないでしょうか。主よ、あなたは彼のことをご存知なのではないでしょうか。敬虔なアナニヤもそのように答えたのです。

彼がこう答えるのも無理はないことです。しかしこのアナニヤの言葉があえてここに記されているのは、あのサウロに起こった回心という出来事がいかにとつともない神のみわざであったかを示すためでしょう。またサウロに与えられる召しの不思議さを強調するためでもあるでしょう。主は彼にどんなご計画を持っておられたのか、16～18節には驚くような三つのことが語られています。

その一つ目は、主はサウロを「選びの器」としているということです。サウロは教会の敵です。主の弟子たちを捕まえ、牢屋に入れ、死にまでも至らせた人です。そのサウロを主はご自身の働きのために用いる道具とすると仰る。15節に「あの人はわたしの名を運ぶわたしの選びの器です」とあります。すなわちサウロはこれから何とイエス・キリストを宣べ伝える宣教

者、宣教師となるということです！それは昔からの計画であると言われるのです。全く考えられないことです。

二つ目に、このサウロに与えられる使命とは「異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に主の名を運ぶ」ということです。これまで宣教はイスラエルに対して行なわれて来ましたが、サウロはもっと広い人々に福音を伝える器とされます。ここで「異邦人、王たち、イスラエルの子孫」という順番になっています。通常、「イスラエルの子孫」が先に記されるのが自然であると考えられますが、「異邦人」が先に来ているのは、この三種の人々にサウロは福音を伝えるとは言え、彼に与えられる働きの中心は「異邦人」に対するものであることを強調するためでしょう。サウロはそのために特に用いられる器なのです。これから使徒の働きで見て行く「異邦人宣教」という新しい展開のためにこそ彼は備えられた器なのです。

そしてもう一つここに示されていることは、主の器としての歩みは決して簡単なものではないということです。16節：「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」そこには必ず多くの苦しみが伴う。いやむしろそれがトレードマークであるということです。イエス様は山上の説教の中で言われました。「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。」実際これから使徒の働きの中で見て行くパウロの生涯は、まさに苦しみの連続と言えます。Ⅱコリント 11 章 23 節からの部分には、彼がいかに多くの苦難を受けたかが列挙されています。牢に入れられたこと、死に直面したこと、39 のむちを受けたこと、石で打たれたこと、難船したこと、一昼夜海上を漂ったこと、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難、・・・しかしこれは十字架を通過して復活に達したイエス様と同じ道を行くことであって、最後にはこの上ない栄光につながっている道です。パウロはピリピ書 3 章で、私は「キリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になりたい。そして死者の中からの復活に達したい」と語っています。このような栄えある働きにあのサウロを召しているという御心を、主はアナニヤに示されたのです。

さてこの命令に対してアナニヤはどう応答したのでしょうか。17 節を見ると、彼はすぐさま主の命令に従ったことが分かります。彼の心の中には、あのサウロと対面するという恐怖もあったでしょうが、その気持ちを振り払って彼は主に従います。思い返せば、主の言葉の中には良い知らせも含まれていました。一つは 11 節にある通り、サウロは「祈っている」と言われていたことです。以前とは違って、サウロは今や、主にへりくだって祈る生活をしている。また 12 節にある通り、サウロにも「アナニヤという者が入って来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになる」という幻が示されてきました。彼は出かけて行って、サウロがいる家に入り、彼の頭の上に手を置いて、まずこう言います。「兄弟サウロ。」ギリシャ語ではまず「サウロ」という呼びかけがあつて、その後に「兄弟よ」という言葉があります。アナニヤはこうして、サウロの名を呼んだだけでなく、彼を主にある「兄弟」として受け入れていることを示したのです。主が受け入れているなら、どんな人をもそのように呼ぶアナニヤの信仰が示されています。これはサウロにとってどんなに慰め深い言葉だったのでしょうか。目の前に来

た人がどんな人なのか分からず、その人に頭に手を置いてもらい、「サウロ」と呼びかけられた後、まず聞いたのが「兄弟よ」という呼びかけであった。もともとは見つけ次第、滅ぼそうと思って乗り込んで来たダマスコの一信者から、こんな優しいことばで迎えられた。それはどんなにサウロの心に大きな感動をもたらすものだったでしょう。

そしてアナニヤは言います。「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」すると直ちにサウロの目からうろこのようなものが落ちた、と記されます。「目からうろこが落ちる」ということわざの起源はここであると言われます。辞書を引くと、こう説明されています。「何かぎっかけになって、急に物事の実態などが見え、理解できるようになることのたとえ。新約聖書・使徒の働き第9章の言葉に基づく」と。サウロはこの時、何を祈っていたのでしょうか。何と言ってもその中心は、キリストと自分の関係についてであったと思います。そして特に自分の罪の赦しを彼は希っていたことでしょう。また主が言っておられた「あなたのしなければならないこと」とは何なのか、それを正しく識別できるように。またそれを行なうことができるように。そして幻の通り、もう一度再び目が見える者とさせていただけるように。そんな中、アナニヤの祈りを通して、直ちに目が見えるようになりました。サウロは光が再び自分の中に差し込んで来るのを感じたでしょう。これは彼にとって、罪の赦しを体験する出来事でもあったでしょう。罪が赦されたしるしとして、自分はこのような視力が回復される恵みにあずかった。そして新しく開かれた彼の目が見つめる世界は、以前と同じではありませんでした。まさに彼は目からうろこが落ち、今や新しい視野を持つ者として、すなわちこれまでのように自分の力で義を獲得して、神の前に誇る歩みではなく、こんな罪の塊である自分を一方的に救い、かつ用いて下さる恵みの主に献身の歩みをささげる人として、新しく生まれ変わったのです。「彼は立ち上がって、バプテスマを受け、食事をして元気づいた」とあります。霊の力が注がれたことに続いて肉体の力も回復されます。こうして霊肉共に元気づけられて、新しいサウロの誕生となります。そして彼はさっそく次の箇所から、与えられた新しい使命に直ちに没頭する人となるのです。

以上の箇所から私たちはどんなメッセージを学び取ったら良いのでしょうか。著者ルカがここで語ろうとしていること、それはこれからいよいよ異邦人宣教が進められるにあたって、主がこのようにそのための特別な器を回心へと導き、さらに召命をも与えたということでしょう。それにしても何という人を主は用意されたことでしょうか。主はキリスト教会の最大の迫害者を、このように救いと奉仕へと召されました。これを思う時、神が何をなさるかには私たちに全く言い当てられないことを思います。主のなさることはただ不思議であり、恵みに満ちています。このサウロを用いて、主はこれから全世界に対する大きな働きを進めて行かれるのです。このことは私たちにとっても大いなる感謝です。なぜならこのサウロの働きがあつてこそ、福音は私たちのところまで届けられるに至ったと言うべきだからです。

また私たちはこの主のみわざを見る時、主が今日も同じように働き手を起こして下さることを願わずにいられません。主は人間が予想もしていなかったところから、ご自身の器を立てられます。ですから私たちはどんな状況にあつても、この主の恵みの導きを祈り求めたいと思います。主が今の時代にも、私たちの周りにも、サウロのような人を起こして、御国のための

働きを大きく導いてくださるように、と。

そして私たちは、自分自身もその一つの器であることを心に留めたいと思います。確かに私たちとサウロは違います。しかしかつて主と反対の道を進んでいた彼が、ただ恵みによって救われ、主の器とされたように、同じくかつては主から離れて歩んでいた私たちを主は救い、さらに尊いご自身の御名を運ぶ器として用いてくださいます。パウロは言いました。「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」「私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにして、死ぬにしても、私たちは主のものです。」サウロが目を開かれて、与えられた召しに喜んで従う新しい歩みへ進んだように、私たちも救いの恵みをいただき、さらにキリストの名を運ぶ選びの器とされる恵みをいただいていることを感謝し、遣わされた場所で御名のために仕え、用いていただく主の器・道具としての新しい歩みと幸いに歩んで行きたいと思います。